

〔個別研究〕

心理診断

愛育相談所 川井 尚

【要約】筆者のこれまでの心の臨床経験を通して、心理面接における「心理診断」とは何かを問うたものが本小論である。「心理診断」とは、クライアントを「よりよく知ること」であり、そのための基本となることを記述した。クライアント利益のために「心理診断」はあり、面接者はクライアントが自分の身体、心、そして行動をどのように体験しているかを知らうとすること、いわばクライアントを体験し、知ること努めることにある。

そして、このように心理診断をしていく面接者をクライアントが体験することにより、クライアントは困難ではあっても自分自身を知るための「自己心理診断」をすることができる。この心理診断について、1. 心理面接と心理診断 2. 心理診断と医学診断 3. 聴くこと 4. 「心理診断」の目指すもの—クライアントと面接者・その相互体験過程—にわけて記述した。そして、初回から終了まで絶えることなくこの心理診断をしながら心理面接を、面接をしながら診断をしつづけていくのであり、この全過程が心の臨床そのものに他ならないとした。

見出し語：心理診断、心理面接

Psychological Diagnosis

Hisashi Kawai

Abstract: In a short article, writer explained how “psychological diagnosis” was conducted through a psychological interview, based on his clinical psychological experience.

“Psychological diagnosis” is “getting to know the client better than himself” and the basics of it were described. “Psychological diagnosis” must be done for the client’s benefit and the psychologist must make efforts to get to know how the client is experiencing his(her) body, heart and behavior. And, when the client experiences “psychological diagnosis” done this way by a psychologist, the client can carry out “self-psychological diagnosis”, in spite of the difficulty doing so. The contents were as follows: 1. Psychological interview and Psychological diagnosis, 2. Psychological diagnosis and Medical diagnosis, 3. Hearing, and 4. The aim of “psychological diagnosis”, the client and psychologist, their mutual experience process. When a psychologist interviews a client in order to conduct a “psychological diagnosis”, it requires continuous diagnosis throughout the course of the interview, from beginning to end. And it was supposed that all these process is exactly a clinical psychological work..

Key word; psychological diagnosis, psychological interview

はじめに

筆者の師のひとりである片口安史先生は、ロールシャッハテストの片口法といわれる著書に「心理診断法」と命名され、いまも版を重ねている。その先生がかって筆者に、診断とは「よりよく知ること」であり、diagnosisの語源であるラテン語にそうあるといわれた。いま調べてみると「知ること」とはあるが、「よく」とはない。しかし、先生はロールシャッハを通しての「心理診断」とは、クライアントを「よりよく知ること」であり、それがクライアント利益につながると確信されていたのだと思う。また、先生が「片口というロールシャッハといわれるが、ほとんどの時間を心理療法にあてている」といわれたことも深く心に残っている。

このことが筆者の心の臨床の基本にあり続けており、あらためて心理面接における「心理診断」とは何か、自らに問うたものが本小論である。

1. 心理面接と心理診断

心理面接は、そのはじまりから終わりに至るまで常に心理診断と共にあり、このことがいかにクライアント利益につながるかを述べたい。

面接はその人をよりよく、より深く知ること、その理解への努力からはじまる。その人を丸ごと知ろうとするのであるが、まずその人が自分自身を、その身体、心、行動を含め、いまとこれまでをどう体験しているか、このことを知ろうと努めることにある。それには、面接者がその人をいかに体験していくか、ここに大きな仕事がある。この知るための体験に大切なことは、まっすぐに、率直に、素直にしっかりと向き合ってみることに尽きる。このようにみて、感じとることが、よりよく知ることにつながる。その人の話を聴きながらみること、

そして尋ねながらみることをつづける。その人のもつ雰囲気とその変化をみて感じとる。表情も姿勢、仕草、全体をみてとり感じとることになる。このとき専門的理論、知識、臨床経験は重要ではあるが遙か背景にあり、決して前景に出てはならない。その人自身がどう体験しているのかを面接者が体験するためには、専門的理論、知識、臨床経験をあてはめてはならないからである。これらが遙か背景にあることによって臨床の勘が働いてくれることになる。この勘働きのあつてはじめて、よりよく知る心理診断への道が開かれる。加えて、面接者の心理診断は、常にあてもあろうか、こうでもあろうか、想像と推測になくなくてはならない。決めつけそれを変えないことは、ここでいう「心理診断」とは全く異なるものである。

もとに戻ると、その人が自分の身体をどれほど体験し、知り、わかっているのか。自分の心、たとえば感情、考え、ものの見方を、そして行動をどう体験し、知っているのかを面接者は知ること努めることになる。いま仮に身体、心、行動とわけて記述したが、その人が自分を体験し知るの、その人の「私」という心である。身体は身体を知ることにはできない。身体を、行動を知ることが唯一できるのは、「私の心」である。

また、クライアントによっては、その人が自分の精神状態（症状）、身体状態（症状）をどのように体験しているかを面接者は知ること努める。どの程度、どのように知りつかんでいるか、元々の自分とちがう、どこかおかしいと感じているか、それを言葉で説明できるか、等々である。このことに関しては次節の記述が大切である。

2. 心理診断と医学診断

ここでいう医学診断とは主に精神医学な

いし神経系疾患の診断をさしている。心理診断は当然医学診断を行わないのであるが、しかし、相談に訪れたクライアントが精神圏ないし精神科治療が必要かどうか、あるいは中枢神経系に由来する障害が基底にあるかどうかを判断することは重要であり、このことがこの領域での「心理診断」である。心理臨床の場で出会う人の多くは典型的な精神疾患を示さない。それだけに、この領域における心理診断はむずかしく、精神医学ないし神経学基礎知識をもつこと、できうれば精神科心理臨床経験をもてるとよい。

ここでの心理診断では、クライアントに漂う雰囲気、表情、身体表現、姿勢、仕草、硬さや柔らかさ、話すことと話し方、これらをよく見て、感じとることである。その結果、心理面接のみではクライアント利益にならない、あるいは不利益であると判断すれば、そのことをよく説明し、同意を得ることに努め、その上で面接者のよく知る専門機関に躊躇なしに紹介する。この判断もこの領域での「心理診断」である。また、各専門領域での治療と並行して心理面接を行うことがクライアント利益になるかどうかの判断も心理診断の仕事である。

また、各種臨床心理検査は「心理診断」の有効な補助的役割を果たすこともあり、その適用の判断も求められる。このときも、クライアントが検査者と検査をいかに体験しているかを知ることが「心理診断」を有用で利益あるものにする。

3. 聴くこと

聴くことの重要性は今更強調するまでもない。ただし、ここで記述する聴くこととは次のようである。まず、その人の話すことだけに集中し、とらわれてはならない。話す言葉にのってくるものも大切にすることである。それは、前述のようにその人自

身、全体を「よりよく知る」ためであり、話のみを聴くことは、ここでいう「聴くこと」にはならない。表面に現れているものも、奥に、裏にあるものもみて、聴き取ろうとするのである。表も大事、奥に、裏にあるものも大事と心得たい。特に、その人の表にのみとらわれ、惑ってはならない。また、クライアントが複雑さを表しているとき、それを無理にときほぐそうとせずにその姿をそのままにみるか、より単純な形を見出そうとするか、あるいはあまりに単純であるときは、その奥に複雑な形があるかどうか、ここにも「心理診断」が求められている。

「よりよく知る」ために、尋ねることも重要である。これまで記述したような「聴く」ことをすすめていくと、わからないこと、理解しにくいこと、あるいは理解するために確かめたいことがはじめて生じる。このとき大切なことは、応えやすいように、言葉にしやすいように、表現しやすいように尋ねることである。

<よい問いのみがよい答えを導き出す>は基本であり、よい問いかけのためには先ずわからないことがきちんとわからなくてはならない。このときも、真っ直ぐに、素直に、真摯にわかりやすいように明確に、はっきりと尋ねる。婉曲に、遠回しに、持って回ったように、あるいはある意図を隠して等は禁忌である。クライアントは勘が鋭く、すぐに見抜かれると心得たい。クライアントがそれに対し応えること、話すこと、あるいは応えられないこと、話せないこと、話したくないこと、これらをこれまで述べたように「聴くこと」である。この展開のなかに「心理診断」が生まれる。

4. 「心理診断」の目指すもの—クライアントと面接者・その相互体験過程—

ここまでは、面接者がクライアントをい

かに「よりよく知る」かについての心理診断を記述した。しかし、「心理診断」の本来自目指すところは、クライアントがいかに自分自身を「よりよく知る」かにある。クライアントの代わりに「心理診断」をするのではなく、その人が自らをよりよく知るために行う「心理診断」の手掛かりを提供するに過ぎない。

面接者がクライアントを知るべく「心理診断」をつづけていくその過程、このような面接者を体験していくこと、あるいはそのような面接者をいかに体験していくかが重要である。このことがクライアントが自ら心理診断していく過程につながるといってよい。

クライアント利益につながる面接者体験とは、クライアント自身が自分をよりよく知ることに直結している。それにはクライアントが面接者をいかに体験しているか、このことに常に思いを及ばせながら心理診断をしていくことである。クライアントが面接者を体験しやすいようにクライアントの前にいることが肝要であり、それには真っ直ぐに、素直に、しっかりと向かい合っていることである。

このように「心理診断」を行う面接者とクライアントの相互体験過程が心理面接過程そのものであるといつてよい。そして、この相互体験過程のなかで、クライアントがいまと、これまでと、これからの自分と向かい合い、出会い、体験し自らをよりよく知る「心理診断」を行うことができる。再度強調するが、面接者が行う心理診断とは、クライアント自らが行う「心理診断」を援助するためにある。人は人を知ること、理解することはできない。知るための努力が重要なのであって、知り、理解できると思うこと自体が傲慢であり「他者不可知」を心得とすべきである。当たり前のことであるが、自分のことは自分でしかできない

という常識も忘れてはなるまい。

面接者は、その人が自分という高く峻険な山を登ること、つまり困難な「自己心理診断」をしていく過程を手伝う助っ人に過ぎない。

このように「心理診断」を記述し、その全体像をみると「心理診断」と「心理面接」はコインの表裏であるといえる。不即不離であって、心理診断のない心理面接はなく、その逆も真理である。面接をしながら診断をし、診断をしながら面接をしていくのであり、このことは初回から終了まで絶えることなくありつづけなくてはならない。この全過程が心の臨床そのものに他ならない。

おわりに

ここに記述した「心理診断」は、片口安史先生はじめ先人の影響を受けながら、しかし筆者の心の臨床経験から生まれたものである。その臨床経験は妊産婦から乳幼児期、そして児童期から老人期にいたり、また、そのもつ心の問題も多岐にわたる。この「心理診断」はその全ての基本となるものであると筆者は信じる。そして、今後も臨床経験を重ね、さらなる基本を見出したいと考える。

文献

1. 川井 尚：母と子の面接入門、医学書院、1990
2. 川井 尚：心理面接のコツ、小児科、Vol. 42 No. 10. 1625—1629 2001